熊本人 HISTORY OF

竹崎順子

◆鈴木 喬 著（歴史家）

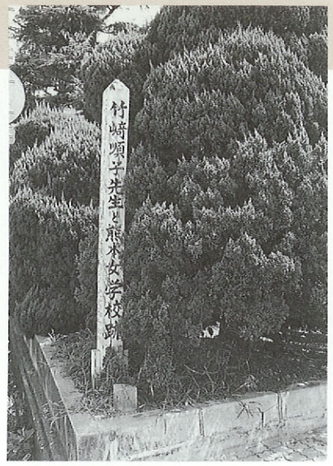
熊本の近代化と新教育の実現者として忘れられない人に竹崎茶堂がある。しかしその業績の蔭には、その妻竹崎順子の限りない内助の功があり、茶堂なき後の順子自身の女子教育上の功績もまた極めて大きかった。

順子は文政八年（一八二五）現在の益城町の東端杉堂で、矢島忠左衛門の四女として生れた。父の忠左衛門はその頃、上益城郡の郡代手附横目役（郡代の下で諸事に目を配る役）であったが、翌年唐物抜荷改方横目役（税関吏）に進み、杉堂から木山町の役宅に移り住んだ。木山で十数年を過したのち、天保九年（一八三八）今度は芦北郡湯浦手永の惣庄屋に栄転した。湯浦ではすぐ隣の総庄屋の徳富家と親しく交際し、十年後には順子の妹久子は徳富家の嗣子一敬の妻になるのである。

天保十一年、順子に縁談がおこった。相手は伊倉随一の豪農で学者の竹崎律次郎（後の茶堂）、仲介は順子の姉にほ子の嫁ぎ先の三村家であったから、話は急速に進み、十六歳の順子は二十九歳の律次郎の妻となった。ところが、順風に帆をあげたと思われた生活も、律次郎の事業熱が裏目に出て、同十三年竹崎家は破産し、家も土地も田畑も総てを失い、律次郎は阿蘇高森に蟄居し、順子は風呂敷包み一つで実家に帰ってきた。これが、夫婦苦難のはじまりである。

その後、律次郎の事業熱もようやくさめ、高森惣庄屋矢野甚兵衛の布田手永転勤を機として、布田（西原村）に塾を開くこととなり、弘化元年（一八四四）順子も再び夫のもとに帰った。その頃、熊本に横井小楠という実学の大学者がいて、夫は月に三回は熊本まで五里の道を会読に出かけて実用の学を学んでいた。

しかし村塾での教育は完全な奉仕活動であったから、生活はすべて順子の肩にかかってきた。夫妻は純粟飯の生活に堪えながら畑仕事をし、養蚕・機織に励み、また蒟蒻・豆腐などを作って売るというきびしい生活を続けた。順子は後年「主人がこの不幸な境遇に陥って、そのために心を磨き、又世の中の為に尽す仕度が出来るかと思うと、只嬉しくて、毎日楽しんで働きました」と語っている。



万延元年（一八六〇）伊倉の木下家から横島新地の監督を依頼してきた。順子夫妻は十七年振りに山を下り、布田でこしらえた財産一切を竹崎家の嗣子新次郎夫婦に譲った。横島に移った律次郎は、目先をきかせてたちまち四十町の耕作主となり、自らが先頭に立って使用人や移住してきた小作農達とともに働いた。横島生活は十年続いたが、家政向一切と働く人々への愛情の眼は、順子の裁量によって取り仕切られてきた。

明治三年（一八七〇）肥後の維新がやってくると、律次郎は藩庁に召出され、夫妻は横島を娘夫婦に任せて熊本へ出た。民政局大属となった律次郎は、徳富・三村ら小楠門下生とともに藩政改革を次々に実行に移していった。しかし徳富と竹崎は義兄第の間柄でありながら意見が合わなくなり、竹崎は遂に同五年辞職して、本山に家塾日新堂を開設した。

日新堂には小学部と普通部があり、小学部は内塾生（寄宿生）が多かった。順子はそれら幼い生徒達の母となり友となり、このときから茶堂と号した律次郎を補佐してその薫陶に当った。内塾の生徒の食事も滋養第一を心懸け、衣服にも気を配り、顔色を毎日見て健康に注意した。茶堂の新しい教育法と順子の慈愛に満ちた訓育によって、日新堂の名は高まるばかりであったが、不運にも茶堂病気のために同九年閉塾のやむなきに至った。

茶堂は高野辺田で病を養ううち翌年五月に六十六歳でなくなり、順子は以後十年間高野辺田に隠棲した。この間に順子の姉妹一族は相ついでキリスト教に入信し、順子にも入信をすすめたが、順子は夫の聖賢の道を守ってこれを斥け続けた。しかし竹崎家に打続く災厄をきっかけとして、同二十年順子と娘節子の二人も遂に入信し、熱心な信者となった。

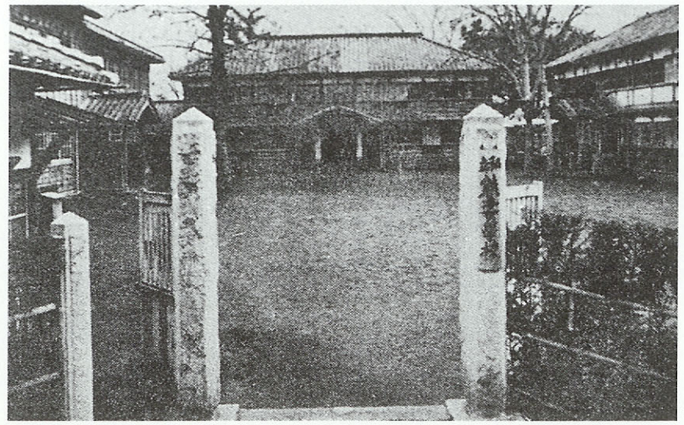
この年、建丁にキリスト教系の熊本女学会が出来、やがて女生徒の世話役として順子の出馬が要請された。順子の奉仕の精神は再び燃え上った。時に六十四歳であった。

二十二年に女学会は熊本英学校付属女学校となり、有志の奔走によって大江に新校舎も出来たので、順子は三十余名の女生徒をつれて引移った。校長は英学校長の兼務で、順子は舎監という職名であったが、実質的には校長であった。学校の運営も教職員の給与も、生徒達の訓育もすべてが彼女の肩にかかっていた。六十台も半ばを過ぎた老舎監は愛しい生徒達のために東奔西走した。

二十九年に九州私学校と改称していた英学校は廃校となったが、熊本女学校と改称していた旧付属女学校は三十年に独立の女学校として認可され、順子が名実ともに校長となった。以来、校長として校母として、全生徒を我が子の如く愛し教育し続けた順子であったが、三十八年三月、数え年八十一歳でこの世を去った。布田の家塾以来実に六十二年の教育者生活であった。校葬では参列者全員が涙にくれて讃美歌が声にならず、歌い出しては涙に消えた。柩は高野辺田まで見送られ、竹崎一家の墓地に葬られた。

「人間には屑はない」「どの花も捨てられぬ」という彼女の教育方針を受け継いだ熊本女学校は、高等女学校令によって大江高等女学校となり、現在のフェイス女学院高校に引き継がれている。

竹崎順子作の歌（自筆）


私立熊本女学校